学会・研究会等の活動

奈文研を会場にして、下記の学会・研究会等が開催された。

◆木簡学会

木簡学会は、1996年12月７～８日の両日、第18回研究集会を平城宮跡資料館で開催した（参加者約170名）。今回は韓国出土の木簡をテーマとし、田中俊明（滋賀県立大学）「韓国木簡出土の現状」、李成市（早稲田大学）「韓国出土の木簡について」の報告があった。また、最近の国内出土事例の報告は以下のとおり。山下信一郎「1996年全国出土木簡概要」、山田真宏（鳥取市埋蔵文化財調査センター）「鳥取市岩吉遺跡出土の木簡」、加賀見省一（兵庫県日高町教育委員会）「祢布ケ森遺跡と出土木簡」、清水みき（向日市教育委員会）「長岡京東一坊大路西側溝出土の木簡」。なお、大会に合わせ『木簡研究』18号を発刊した。（舘野和己）

◆長屋王家木簡検討会

平城宮跡発掘調査部史料調査室では、1990年度以来、長屋王家木簡検討会をもち、大量に出土した長屋王家木簡・二条大路木簡の釈読にあたるとともに、年に２回の研究会をおこなっている。96年度は２度の釈読検討会と、以下の研究会をひらいた。12月13日：門脇禎二（京都橘女子大学）「長屋王家の『家産』経営」・古尾谷知浩「長屋王家の没官」。３月26日：和田萃（京都教育大学）「南山の九頭竜」・佐藤宗諄（奈良女子大学）「長屋王家木簡小考～『所』とその機能」。なお所外研究者は、堀池春峰（東大寺）・岩本次郎（甲子園短期大学）・鬼頭清明（東洋大学）・東野治之（大阪大学）各氏が釈読検討会と研究会に、直木孝次郎（甲子園短期大学）・門脇禎二・狩野久（岡山大学）・関根真隆・佐藤宗諄の各氏が研究会に毎回参加されている。（舘野和己）

◆条里制研究会

条里制に関わる学際的な研究会で、現在会員数は考古学・地理学・文献史学の研究者など約350人。毎年１回の研究大会を開くとともに、研究報告や発掘事例報告などを収めた会誌『条里制研究』を刊行している。97年３月８～９日には「条里と開発」をテーマに第13回大会を奈文研で開催した。今後は都市の問題も積極的に取り上げる研究会として発展させようとする提案もなされている。（山中敏史）

◆官営工房研究会

12月24日に研究会を開き、櫛木謙周（京都府立大学）「首都における手工業の展開」の報告後、質疑・討論をおこなった。櫛木氏は、官営工房に限定せず、都城の手工業の問題を、手工業生産の首都への集約という観点から、首都としての特質を見据えつつ、平安時代まで展望した。この報告をめぐって、長屋王家木簡にみえる工人たちが長屋王家専属なのか、工人たちの活動痕跡を遺構として確認できるのか、官営工房の専属労働者と雇用労働者の賃金支給方法の違いはなぜ生じるのかなどの点を議論した。今後も考古学と文献史学の共同による個別の事例研究を重ねていく予定である。なお、昨年度の研究会の成果を『官営工房研究会会報４』として刊行した。（渡邊晃宏）

◆中国建築史研究会

田中淡氏（京大人文研）を中心とする中国建築史研究会を４回開催した。発表は以下のとおり。７月22日：何培斌（香港中文大学）「唐代仏寺　―『祇園寺図経』と敦煌壁画“浄土変相”小考―」、11月18日：楊鴻勛（中国社会科学院考古研究所）「唐長安大明宮含元殿の考古発掘と復原研究の新収穫　―平城宮第１次大極殿との相同点―」、３月６日：楊志軍（黒龍江省文物管理局）「渤海上京龍泉府遺跡の発掘と整備」、３月11日：栗原伸治（総合研究大学院大学博士課程）「窰洞の再分類および固有性」・坂田昌平（京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程）「黒龍江朝鮮族の集落と住まい」。（浅川滋男）

◆建築史談話会

建築史談話会は関西の建築史研究者・修理技術者等の研鑽と交流の場である。以下の研究発表および見学会をおこなった。６月１日：金剛峰寺不動堂修理工事現場見学会。７月13日：酒井一光（大阪市立博物館）「尾張式社殿配置の研究」・黒田龍二（神戸大学）「神戸市北区前中家住宅の解体調査」。10月18日：冨島義幸（京都大学大学院）「法成寺の塔について」・藤田盟児（名古屋造形芸術大学）「岡山市域の近世寺社大工の階層性について」。11月８日：本願寺飛雲閣修理工事現場見学会。12月７日：溝口正人（名古屋市立大学）「中世即位式と平安宮大極殿」・光井渉（神戸芸術工科大学）「山岸常人著『日本建築の方法論』を斬る」。（箱崎和久）

講演する楊鴻勛先生（中国建築史研究会）

◆古代の土器研究会

歴史時代の土器の様相の解明を目的として活動をおこなっており、1991年からほぼ年１回の割合でシンポジウムを開いてきている。今年度は９月24・25日に第５回シンポジウムを開催し、土師器の煮炊具に関して各地域の事例を検討した。都城で使用する煮炊具は「都城型」と呼べる定型化したもので、その生産者集団は都城の移動にともなって移住し生産をおこなうことや、地方との交流が明確となるなど多くの成果を得た。（玉田芳英）

◆東アジア旧石器研究会

1997年３月23日、奈文研で講演会「東アジア最古の人類文化を求めて」を開いた。講演者は、黄慰文教授（古脊椎動物・古人類研究所）と謝飛所長（河北省文物研究所）。黄教授は広西百色遺跡と貴州大洞遺跡での最新の発掘成果を報告し、謝所長は、泥河湾地区で実践しつつある旧石器研究の方法論と前・中期の旧石器遺跡の調査状況を語った。いずれも最新の中国旧石器研究の成果と問題意識の高さを示した。（加藤真二）

◆埋蔵文化財写真技術研究会

７月５～６日の両日、第８回研究会をおこなった。参加者約100名。研究会の時期にあわせ、西安碑林博物館の羅忠民氏を招聘し、講演していただいた。『埋文写真研究』vol.7を刊行。（佃　幹雄）